

広告 企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

房総伝統技法「萬祝染」を現代に生かす

鈴木 理規 千葉県／四代目萬祝染職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:レクサス)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりに応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏(建築家/東京大学教授)、グエナエル・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究)らをサポートメンバーに発足。第1回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。



エリア・コンサルティングにて

昨年夏、レクサスギャラリー・高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか?」「地域のオリジナリティはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。



1月18日、プレゼンテーションにて

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出すようにしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。千葉県産出の匠、四代目萬祝染職人・鈴木理規さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。



スーパーバイザー 小山薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



完成したクラッチバッグ「ENISHI」

縁起の良い凶柄生かす 出会い・幸運を購入者に

鴨川市で、江戸時代から続く萬祝染(まいわいぞめ)を受け継ぐ鈴木さん。91年続く染物店「鴨川萬祝染 鈴染」の4代目は、房総半島の伝統技法を用いてクラッチバッグ「ENISHI」を作成した。

萬祝は大漁祝などの宴会で配られた晴れ着で、県指定伝統的工芸品。1811(文化8)年の古文書で初見され、木綿の生地に顔料で縁起物の鶴や亀、よく捕れたタイやイワシ、サンマなどの凶柄が描かれる。

今回のプロジェクト当初は洋服を考えたが、素材の関係などから断念。縁起の良い凶柄を生かし「結婚式でも使えるように」とクラッチバッグにたどりついた。そこで出た課題が二つ。一つは飾る商品からより実用的な日用品へ。二つ目は、若い世代にも興味を持ってもらうことだ。10点以上の試作品を制作するなど試行錯誤。その結果、和装でも洋装でも、ビジネスでも遊びでも、どんなスタイル、シーンでも持ち歩けることをコンセプトに、両面の柄を変えることで飽きのこないデザインを採用した。持つ人が自由に使えるようにとあえて折り目をつけず、大きさはノートパソコンと付属品などが一緒に入れられるように設定。また、シンプルな作りによることで、バッグインバッグとしても使えるよう

に配慮した。凶柄は若者好みに。子どもたちを対象にした日頃の染物体験の活動から、若い世代に

現代人にも愛される 「萬祝染」をつくるのが夢

こだわりはプロダクト名にも。萬祝を持つことは古くから仕事ができる人の証し。縁起の良い凶柄が購入者に良い出会い・出来事をもたらしてくれることを願って、「ENISHI」と命名した。さらに、昨年10月に工房を訪れたサポートメンバーの生駒氏から自立しないことやブランドロゴがない点、縫製の改善などのアドバイスを参考に、ブランドロゴを付け

鶴の凶柄が人気があると実感していたため、片面は日本らしく日の丸を背景に羽ばたく鶴を鮮やかに染めた。反対の面は鶴や亀などの小紋柄を入れた。厚めの木綿を素材に、地色は天然染料の柿渋を使用。落ち着いた雰囲気の色合いに仕上がった上、時がたつほどに色合いが変化し、長く楽しめる逸品が出来上がった。



商談会に参加した鈴木さん

「昔ながらの技術を守りつつ、いかに現代に生かしていくか」に頭を悩ませているという千葉県の匠。他の匠との出会いは刺激となり、新たなインスピレーションをもたらしたようだ。「他の匠と出会ったことで新しいアイデアが生まれた。機会があれば、他の匠とのコラボレーションにも挑戦してみたい。国内で認知度を高め、海外でも日本の伝統工芸品を知ってもらいたい」と目を輝かせた。

より洗練されたクラッチバッグを今年1月の商談会に出展した。「バッグは新しい挑戦だった。天然染料の柿渋染めも自分にとってチャレンジ。柿渋染めは半年後に色合いが出てくるので、色の調整が難しかった」と今回のプロジェクトを振り返る。購入層として20代後半から40代を意識。「このバッグを持つことで、少しでも気分が明るくなってほしいですね。萬祝染などの伝統工芸に興味や関心を抱ききっかけになればうれしい」と期待する。



鈴木 理規 千葉県／四代目萬祝染職人

1990年千葉県鴨川市生まれ。大学在学中にバックパッカーで米国を横断し、モントレールにある個人ミュージアムで祖父の作品と出会う。神田外語大学国際ビジネスキャリア学科卒業後、家業である萬祝染の四代目継承のため、修行開始。昔ながらの染め方を尊重しながら新たな作品作りに力を注ぐ。また、年間600名程の子供たちに萬祝の文化を伝える染物体験の活動も続けている。



萬祝染めの晴れ着



鈴木さん制作風景

